

## 第一信号系の特性

平井慎二

逸脱した行動や不快な自律神経症状、気分を反復して生じさせる反射を抑制し、抑制された状態を保つために、第一信号系が次の特性はもつことを知り、それらへの対応を技法の構成に組み込むことが求められる。それらの特性は、先天性な反射は可塑性が低く、後天的な反射は可塑性が高いという差異があること、ならびに行動の駆動性を過酷な体験が高めること、頻回に生じた反射は抑制されても放置されると回復することである。

### 1) 先天性な反射と後天的な反射の可塑性の差異

環境の変化や治療的対応により、動物がある時点でもつある反射は未来の一時点までに変化する。その変化の早さは、その反射がそれまでに反復されてきた期間および回数、頻度等によるのであり、従って、先天性か後天的かで大きくことなる。

本能行動を司る反射連鎖の本流となる先天性な反射は、遺伝子を通じて前世代から受け継いだものであり、前世代まで長期に存続し、数多く作動してきた反射である。

生後まもない動物は防御と摂食の能力が低く、親の保護を受ける行動をとる個体が生き延び、後には行動能力が高まり環境との活発なやりとりにおいて前世代まで生命を支えた行動をとる個体が生き延びて子孫を残し、また、天変地異により環境の変化があっても存在する地球上の位置に大きな変化は無く、再び、同様の環境に戻るのであり、その中で同様の行動をとる個体が生き延びてきた。つまり、前世代までに決定していた行動をとる個体が生き延びたのであり、そのように行動を受け継ぐ現象は、遺伝子に組み込まれ、各世代で僅かずつ変化を受けた情報が、現世代に先天性な反射として発現することによる。

その先天性な反射は進化的に変化するのであり、1代では目に見える変化は生じず、治療的対応で変化させられない。

一方、後天的な反射は各個体の生後に形成されたものであり、可塑性に富み、各世代で状況の変化により大きく変化するものであり、治療的対応で容易に変化する。

### 2) 行動の駆動性に影響する生育環境

第一信号系は生命を支えた行動を再現する中枢である。危機的状況に対して生きる方向の行動を司る反射が作動する性質をもつ動物が生き残ってきた。その性質により、危機的状況に対して生き延びた行動が生じ、生き延びたのであるから防御に成功し、生理的報酬が生じ、生き延びた行動の再現性が高まる。

未成年期に家庭の構成員間の不和、饑餓、貧困、家庭内や学校、その他での虐待、大病、事故、災害、戦争などの危機的状況を体験したヒトは、日常的に生じる、あるいは継続する、あるいは単発の危機的状況を生き延びたのである。したがって、そのようなヒトがもつ第一信号系は生きる方向への行動を司る反射が早く強く生じやすく、日常のさまざまな出来事に過敏であり、些事に対しても激しい反応が生じ、第二信号系の制御を越えた行動が生じ易い。

逆に平安な家庭で無事に生育したヒトは、未成年期を周囲からの刺激にゆっくりと反応することで生きてきたのであり、後にも日常のさまざまな刺激に対して穏やかに

反応し、第二信号系が優勢である精神状態で行動する成人になることが多い。

### 3) 抑制後の放置による元の反射の回復

地球の自転軸は公転軸に対して傾いており、それが地球に季節を生じさせている。

ある季節で生命を支えた行動はその季節で頻回に反復される。

次の季節では、前の季節から残った同一の刺激に対して同じ行動が当初は生じるが、環境が変化しているために、生命を支えることに失敗して生理的報酬が生じず、元の季節で生命を支えた行動を司った反射は抑制が進む。

季節がめぐり、環境が大きく変化し、元の季節で生命を支えた行動を司った反射に対する刺激がない季節になり、その季節では、元の季節で生命を支えた行動を司った反射は刺激されず、放置される。

元の季節で生命を支えた行動を司った反射がどのように変化するかを、放置された間に反射の回復が良好な群と放置された間に回復が不良な群の両方を想定して、次のように考えた。

回復が良好な群は、季節がめぐり、また、元の季節に戻ったとき、環境に適応した行動が反射で生じ易く、生き延びた。

回復が不良な群は、季節がめぐり、また、元の季節に戻ったとき、環境に適応した行動が反射で生じ難く、生きる競争に負け、絶滅した。

生き延びた群が現生の動物であり、現生の動物は生き延びた群の性質をもつ。つまり、現生の動物の第一信号系において、一時期、頻回に成功した行動を司った反射は、後に抑制されても、刺激されず放置されれば、その間に反射は良好に回復する性質をもつ。